

令和 5 年 5 月 25 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18H00697

研究課題名(和文) 暴力による民主主義の20世紀：トランスナショナルヒストリーの試み

研究課題名(英文) Democracy by Violence in the Twentieth Century: A Transnational History

研究代表者

長縄 宣博 (Naganawa, Norihiro)

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・教授

研究者番号：30451389

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,800,000円

研究成果の概要(和文)：シリアからウクライナへの戦争の連鎖やグローバル・サウスの台頭は、1870年代から始まる欧米の帝国主義で加速したグローバル化に特徴づけられる「長い20世紀」の終焉に伴う地殻変動である。本研究はこのような新しいパラダイムを構築すべく、中央ユーラシア近現代史を専門とする研究代表者が、バルカン半島・中東の民族問題、南アジアのイスラーム、そしてアメリカ合衆国の帝国性を専門とする研究分担者と議論を重ねた。そして、国際的なインパクトを持つ論考や論文集を発表し、国際的な研究者ネットワークを作る研究会を国内外で組織した。とりわけ2021年度には、アフガニスタンとウクライナの危機に即応する解説も発信した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で提唱した「長い20世紀」論は、国家権力と社会との垂直方向の相互関係に論点を集中させてきた近代帝国論に、帝国の環境で育まれた人間集団の自己組織能力や水平方向のネットワークに関する研究蓄積を組み込むものである。それは、帝国秩序の崩壊と国民国家の建設という20世紀に繰り返されてきた激動のなかで、人間がどのような生き残り戦略を編み出してきたのかを重視する。これは、危機の時代を生きるわれわれにも不可欠な知見である。コロナ禍で権力が露呈する不寛容、介入、無責任に対して人々が抗議運動を繰り広げ、グローバルな連帯を示したように、「長い20世紀」の遺産は現代世界にも受け継がれている。

研究成果の概要(英文)：The continuum of crisis from Syria to Ukraine and the rise of the Global South are taking place at the end of the "long twentieth century," which has been marked by globalization prompted by the Western imperialism since the 1870s. Many scholars have regarded the year of 1991, namely the collapse of the Soviet Union, as the end of the short twentieth century. We contend that we are now witnessing the end of the twentieth century. This new paradigm is a result of the discussions among the experts of modern Central Eurasia, nationalities questions in the Balkan and the Middle East, Islam in South Asia, and the American liberal empire. While forging an international collaboration through arranging a variety of meetings home and abroad, we published our works in the internationally recognized journals and edited volumes. Predicated upon our historical explorations, we also broadcast our own visions immediately reacting to disasters in Afghanistan and Ukraine in 2021 and 2022.

研究分野：中央ユーラシア近現代史

キーワード：20世紀 暴力 民主主義 帝国 イスラーム ナショナリズム 社会主義 ネットワーク

1. 研究開始当初の背景

本研究を始めた2018年は、冷戦後の「アメリカの平和」がもはや持続可能ではないことが明白になり、現代世界が直面する暴力の来歴を説明することが歴史学にとって喫緊であると研究代表者と分担者は意見を共有していた。私たちは、「テロとのグローバルな戦い」「アラブの春」と名付けられ、輝かしい理想の下で正当化される過剰な暴力の連鎖を目の当たりにした。また、これらの惨事から逃れた人々が向かうEUとアメリカ合衆国ではイスラームの名の下でテロが頻発し、グローバリゼーション、自由貿易、移動の自由、多文化主義など、いわば近代性を背負ってきた(と自負してきた)人々が、その近代性はもはや自分たちの割に合わないと言出し始めていた。ロシアは、欧米中心の秩序によってもたらされた不正義を糾すという論理でウクライナやシリアでの軍事行動を正当化した。その一方で、2014年のウクライナ危機とイスラーム国の台頭は、強圧的な国家権力の消失後、その体制下で発達してきた市民社会が解き放たれ、それが秩序回復のために擬似国家的編成まで獲得してしまうことも示した。本研究は、特定の地域の文脈を踏まえつつ、過去150年にわたる帝国/大国の介入と市民の暴力との複雑な関係性を解きほぐすことを目的としたが、2022年2月のロシアのウクライナ侵攻とその後の世界秩序の激変は、本研究の着眼点が極めて先駆的だったことを証明している。

2. 研究の目的

20世紀における三つの民主主義の表現(国民主義、社会主義、イスラーム主義)が生み出した緊張の構造や暴力は今日もなお持続している。本研究の目的は、これらの主義が生育しグローバルに拡散し始めた1870年代に始まる帝国主義の時代から今日までを「長い20世紀」と捉え、現代世界が直面する暴力の来歴を説明することにある。その際、ロシア/ソ連を囲む東欧、バルカン半島、中東、南アジア、東アジアの境域に加え、20世紀のもう一つの帝国であるアメリカの介入の論理も分析の中核に据えることで政治体制を越える比較と連関の網を設定し、トランスナショナルヒストリーの新しい枠組みを提案する。そして、帝国と個々の人間集団との交渉が織りなす複雑な力学を解明すべく、これまで別個に研究が蓄積されてきた近代帝国論と市民社会論を組み合わせて方法を開拓する。

3. 研究の方法

本研究は、1)帝国秩序への抵抗(1870年代から1920年代初頭)、2)反帝国主義の時代の国民形成(戦間期から冷戦期へ)、3)拡散する戦闘的イスラーム主義者(1979年以降)という三つの軸を設定した。研究代表者の長縄は1)の軸について、20世紀初頭の三つの革命(ロシア革命、イラン立憲革命、青年トルコ人革命)のメッセージが広域のムスリム青年の間に流通した経路を考察すべく、ヴォルガ・カスピ水系に着目した。また、2)の軸について、1905年以降に革命の空気を吸った若者が、1917年のロシア革命と内戦を経て、初期ソ連の中東外交に関わっていく側面にも注目した。それによって、旧ロシア帝国のムスリム地域(とりわけ中央アジア)の内戦と戦間期中東の形成を同時に捉える視座を得た。さらに、本研究全体の理論的な貢献を強化すべく、ロシア/ソ連と周辺世界との相互作用の観点からロシア革命を20世紀史に位置付けることに取り組んだ。研究分担者の草野は三つの軸すべてに関わる形で、「非公式の帝国」としてのアメリカをめぐる「四つの波」(建国初期(北米帝国)、海洋帝国(西半球帝国)、冷戦期(西側帝国)、冷戦後(世界帝国))の時期区分を設定し、1990年代から露になったアメリカの介入主義の系譜を研究した。そしてその視座から、シリアからウクライナに連なる現代世界の危機を読み解いた。山根は3)の軸について、イラン・イスラーム革命とソ連のアフガニスタン侵攻のイスラーム世界への衝撃を捉えるべく、パキスタンのイスラーム党本部の図書館(ラーホール)で資料収集を行い、ウルドゥー語のイスラーム主義者の文献がどのように翻訳され広まったのかを分析した。佐原は2)と3)の軸を架橋する形で、第二次世界大戦後の内戦とパラミタリー(準軍事組織)の比較研究に取り組み、その角度から20世紀のバルカン諸国の極右政党の思想交流を研究した。また佐原は、欧州難民危機後のバルカン・ルートの移民・難民流入抑制策の破綻と、その結果としての陰惨な人権侵害の現状についてフィールドワークも精力的に行った。このように本研究は、国家権力と社会との垂直方向の相互関係を論点を集中させてきた近代帝国論に、帝国の環境の中で育まれた人間集団の自己組織能力や水平方向のネットワークの視座を組み込みことで、新しい20世紀の見方を提唱しようとしたのである。

4. 研究成果

新型コロナウイルスの流行で、5年間の研究機関のうち後半3年間は、現地調査も国際研究集会でのネットワーク作りも著しく困難だった(2022年はロシアのウクライナ侵攻のため、ロシアでの調査が事実上、不可能になった)。新しい史料の博捜には制約があったとはいえ、幅広く二次文献を読んで従来の研究のパラダイムを見直し、既存の史料を読み直し、そしてパラダイムと個々の事実を往復する考察を繰り返すことで、20世紀論の新しい可能性が開けた。

(1) 「長い20世紀」論の精緻化

本研究は、帝国や国民国家の垂直方向の統治と抵抗する人々の水平方向の協力との間の複雑なトランスナショナルヒストリーとして、20世紀を捉える新しい枠組みに辿り着いた。現在多くの研究者が、20世紀は第一次世界大戦に始まりソ連解体に終わる短い世紀だったと考えている。そのような見方を代表するのが、エリック・ホブズボウムの *The Age of Extremes: A History of the World, 1914-1991* である。ロシア史研究者の和田春樹も1992年に『歴史としての社会主義』で、ソ連解体によって世界戦争の時代、国家社会主義体制の時代としての20世紀が終わったと考えた。和田は当時、ソ連解体と共に帝国アメリカも終わったと考えたが、その後の歴史を知る我々はアメリカ帝国が9.11以降むしろ強化されたことを目撃している。藤原帰一は『デモクラシーの帝国』を書いている。冷戦がソ連とアメリカという二つの帝国の競争であり、アメリカがその生き残りだったとすれば、20世紀はヨーロッパとアメリカの帝国がグローバル化を推進した時代として捉え直すことができるのではないかと。

その場合、20世紀の始点は1870年代に置くことができる。多くの研究者は、1870年代以降、第一次グローバル化が始まったと考えている。鉄道や汽船など蒸気機関による交通機関が発達し、電信による通信速度が向上することで、ヨーロッパの帝国は広大な版図を機能的・効率的につなぎ合わせ、地表を覆うようになったのである。そしてヨーロッパの帝国は、植民地統治をより社会にまで浸透させる志向を持ち、住民を丸ごと囲い込み、殲滅する社会工学的な暴力を発達させた。この植民地で実験された暴力の技術がヨーロッパに還流したのが、第一次世界大戦に他ならない。日本ではイギリス帝国研究者の木畑洋一が、このような帝国の暴力性を捉えて1870年代から長い20世紀を考えるべきことを提唱している（ただし木畑の20世紀はソ連解体で終わる）。

他方で、交通機関や通信の発達は、帝国統治の役に立つだけでなく、帝国に支配されている人々にも帝国に抵抗するための大きな可能性を開く。様々な帝国の弾圧を避けて多くの若者が、ヨーロッパや南北アメリカを含む広範な国々を渡り歩き、その過程で、同様の境遇にあった多民族・多宗教の活動家といわばコスモポリタンな交流を展開した。コミンテルンやソ連が成立する以前、社会主義の様々な党派、リベラリズム、立憲主義、反帝国主義、ナショナリズム、さらにはイスラーム主義の境界は未分化で、ローカルな問題の処方箋として、グローバルな様々な思想を折衷することが普通だった。ポリシェヴィキもまた、19世紀末から20世紀初頭のグローバルな旅人の一集団に過ぎなかったのである。

さらに、諸帝国が植民地の臣民を啓蒙するために公教育の普及に努め、それが及ばない地域では地元の知識人が伝統的な教育の改革に着手することで、西欧や米国起源の国民、自由、平等などの理念が、非西洋の人々の間にも普及するいわば知識の民主化が進行した。こうして、民族(国民)の形成が目標として広く共有されるようになる。また、社会主義もヨーロッパよりもむしろロシアやアジアの若者を魅了し、その実現まで構想する人々も現れ、実際に実現もさせたことは強調しておいてよい。こうして、水平方向のネットワークの中で生きていた人々は、ある特定の歴史的状況と地域の文脈の中で、垂直方向の権力、つまり国家を作るようになる。しかしそれは、帝国から国民国家へという直線的な目的論ではない。独立国家を持つことは活動家の間で広く共有され、互いに協力もするものの、その国家がどのように運営されるかをめぐって、激しい権力闘争が生じるのであり、新しい国民国家から排除される人々が再び既存の権力に対抗するために新たなネットワークを作るようになるのである。

本研究で明らかになった「長い20世紀」は、非西洋の人々の帝国主義への怒りと抵抗、自由・平等・主権を求める水平方向の移動とネットワーク、自分たちの考える故郷における国民国家の建設に特徴づけられる。この20世紀論では、世界大戦はあくまでも帝国間の戦争であり、その戦争の間、抵抗する人々は既存の国家に協力するか、あるいは水平方向のネットワークで生き延びようとする。本研究の20世紀論が重視するのはむしろ、戦後の混乱の中で、抵抗者が独自の国家を建設しようとしたことにある。

では、長い20世紀の終点はどこにあるのか。ロシア帝国とソ連、そしてオスマン帝国の歴史が教えるところでは、帝国の終焉は中核の民族(ロシア人とトルコ人)が帝国を維持するのは割に合わないと考え始めるところから始まる。トランプ前大統領に象徴されるように、アメリカは過去30年で唯一の超大国から自国第一主義に凋落し、現役大統領が選挙という民主主義の根幹を否定する事態にまで陥った。2007-2008年の世界金融危機以降に目立ち始めたアフガニスタンやイラクの戦争によるアメリカの疲弊、アラブの春をめぐる混乱と暴力、シリアからウクライナへの危機の連鎖は、アメリカの平和が終わろうとしていると見ることはできるのではないかと。これは、冷戦後の国際秩序の終焉だけでなく、アメリカの帝国が終わりを迎えているのではないかと。それは、1870年代ごろからはじまる欧米中心の世界秩序が今終わろうとしているのではないかと。つまり、長い20世紀は今終わろうとしているのではないかと。

(2) 国際的にインパクトのある成果発表

研究開始当初、上記のトランスナショナルヒストリーの見立ては、仮説的な性格が強かったものの、研究分担者とその他の協力者との議論と検証を通じて、実証的な研究を進める枠組みとして有用性が高まった。こうした新しいパラダイムの構築を目指すことで、国際的にも認知される業績を上げることができた。

研究代表者の長縄は、Web of Science に登録されているインパクト・ファクター付のロシア・ユーラシア史研究の英文雑誌 *Ab Imperio* と *Kritika: Explorations in Russian and Eurasian History* に論文を掲載できた。この2本の論文は、戦争とムスリム兵士の経験を考察するものであり、帝政ロシアの戦争の経験が1917年以降の革命と内戦に引き継がれ、とりわけ中央アジアの革命にも波及していく動態を描いた。*Ab Imperio* に2020年に掲載された論文は、その年に当該に掲載された論文で最良のものとして表彰された。また長縄は、ロシア/ソ連と周辺世界との相互作用の観点からロシア革命を20世紀史に位置付ける英文論集 *Dreams of Emancipation: A Transnational History of Revolutionary Russia* の編集を進め、米国の Academic Studies Press からの出版に目途をつけた。研究分担者の草野は米国のリベラルな帝国の衰退過程の分析に取り組み、論集 *Non-Western Nations and the Liberal International Order* の編集を進めた（英国の Routledge 社より近刊）。

最終年度の2022年には本研究の総括として、札幌で国際シンポジウム *An Anarchist Turn? Imperial Rule and Resistance in the Long Twentieth Century* を開催し、次の問題を議論した。1) ラディカリズムのグローバルな拡散、2) 第一次世界大戦と帝国の崩壊、3) 脱植民地化と反帝国主義、4) 越境するイスラーム主義者、5) 冷戦後の「アメリカの平和」、6) ウクライナ戦争の波紋。そのうち長縄は1)で、山根は4)、草野は5)で、佐原は6)で報告した。
<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/sympo/2022summer/index-j.html>

(3) 国際的なネットワークの構築

佐原は、ベオグラードのセルビア現代史研究所と関係を深め、2019年にはパラミタリーに関する研究会を組織した。2022年には、本研究の総括シンポジウムのため同研究所所属の研究者が札幌を訪問し、1990年代のNATOによるセルビア空爆に関する報告を行った。長縄は、モスクワの高等経済学院のロシア史研究グループと交流を深め、2019年にシンポジウム「帝政ロシアの地方再訪：文学的想像力と地政学」を札幌で行った。コロナ禍でもオンラインの国際会議を開いていたものの、2022年2月のロシアのウクライナ侵攻以降、交流が途絶えてしまった。なお、長縄の初期ソ連の中東外交に関する研究は国際的な注目を集め、2021年にはプリンストン高等研究所に滞在する機会も得た。また、中東とりわけアラブ地域におけるロシアのプレゼンスの大きさを歴史的な背景を含めて理解できるように、一次史料を厳選し、英訳し、解説する国際プロジェクトにも招かれ、その成果はオクスフォード大学出版会から2023年春に出版された。

(4) 今起こっている危機を即応的に解説

本研究は、その当初の背景からも現代世界が直面する暴力の来歴を説明することを目的としてきたから、歴史研究を軸にしながら現状についても意見交換を重ねられたことも特筆すべき研究成果である。とりわけ2021年度は、同年1月のアメリカ議会議事堂襲撃事件、8月の米軍のアフガニスタン撤退とターリバーン復権、2022年2月のウクライナ戦争の開始という激動を背景に、本研究の実用性が著しく高まり、時事解説を積極的に発信した。これら一連の事件は、ポスト冷戦の世界秩序の終焉とよく説明されるが、本研究は、1870年代に始まる欧米中心の帝国主義的なグローバル化が今終わろうとしているという見立てを「長い20世紀」と概念化してきた立場から、パクス・アメリカーナの終焉を一世紀半の地殻変動に位置付けることを試みた。草野は、アメリカの困難に正面から取り組むべく、トランプ外交の「米国第一」が、いかに「リベラル国際秩序」(多角主義、民主主義、自由貿易を基盤とする秩序)に挑戦するものであったのかを一世紀ほどのタイムスパンで考察する論考を発表した。山根は、ターリバーン政権の復活を受けて、それを折しも20周年を迎えた9.11の再考も織り交ぜながら、数百人が集まるウェビナーで解説した。長縄は、10月のロシア史研究会の年次集会で、東欧、中国、中東からソ連解体30年を考えるものと、ロシア帝国の遺産という観点から戦間期のソ連と中東の相関を考える2つの共通論題を組織した。大会からちょうど4か月後にロシアがウクライナに侵攻したことを知る現在から振り返ると、ロシア/ソ連という視座から20世紀史の再考を試みたことの意義は小さくない。3月には佐原と長縄が、東京外国語大学の「イスラーム信頼学」プロジェクトと連携して、ウクライナ戦争に関するオンライン・シンポジウムを開催した。開戦当時は米欧中心の観点の解説が圧倒的だったが、シリアからウクライナへの連鎖やグローバル・サウスの重要性を指摘した点で異彩を放った。

(5) 後継プロジェクトの立ち上げ

本研究で考察が深まった「長い20世紀」論を応用して、スラブ・ユーラシア研究センターで、文部科学省の概算要求プロジェクトとして、「国際的な生存戦略研究プラットフォームの構築」が立ち上がった。<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/srcw/>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Naganawa Norihiro	4. 巻 24
2. 論文標題 Officious Aliens: Tatars' Involvement in the Central Asian Revolution, 1919-21	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Kritika: Explorations in Russian and Eurasian History	6. 最初と最後の頁 63 ~ 92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1353/kri.2023.0002	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Naganawa Norihiro	4. 巻 1
2. 論文標題 Tatars and Imperialist Wars: From the Tsar's Servitors to the Red Warriors	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Ab Imperio	6. 最初と最後の頁 164 ~ 196
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1353/imp.2020.0004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山根聡	4. 巻 6
2. 論文標題 (翻訳) ジャーヴェード・イクバル「詩人ムハンマド・イクバルのラーホールでの学生時代」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 印度民俗研究	6. 最初と最後の頁 8 ~ 18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山根聡	4. 巻 91
2. 論文標題 新型コロナ禍におけるパキスタン情勢から見えるもの	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際情勢	6. 最初と最後の頁 171 ~ 179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Fujita Taisuke, Kusano Hiroki	4. 巻 20
2. 論文標題 DENIAL OF HISTORY? YASUKUNI VISITS AS SIGNALING	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of East Asian Studies	6. 最初と最後の頁 291 ~ 316
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1017/jea.2020.2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長縄宣博	4. 巻 47
2. 論文標題 Elusive Piety: Hajj Logistics and Local Politics in Tatarstan, Dagestan, and the Crimea	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Religion, State and Society	6. 最初と最後の頁 307-324
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/09637494.2019.1605777	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 草野大希	4. 巻 198
2. 論文標題 ウィルソンのリベラル介入主義の再考 現代のリベラル介入主義におけるウィルソン主義の展開	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際政治	6. 最初と最後の頁 127-142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11375/kokusaiseiji.198_127	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山根聡	4. 巻 90
2. 論文標題 2019年2月印パ対立からみたパキスタン情勢における軍と司法のバランス	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 紀要 国際情勢	6. 最初と最後の頁 115-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山根聡, Imran Akhtar	4. 巻 3
2. 論文標題 Lingual Categorization of Urdu Prose towards the Study of 'Urduness'(1775 to 1850)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 外国語教育のフロンティア	6. 最初と最後の頁 41-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/75622	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 佐原哲也	4. 巻 11
2. 論文標題 アメリカ合衆国のシナゴーク襲撃事件とオルタ右翼の「代替」理論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 いすみあ (明治大学教養デザイン研究科)	6. 最初と最後の頁 1-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 草野大希	4. 巻 3
2. 論文標題 サルマーン国王即位後の米国の対サウジアラビア外交：オバマとトランプ政権下で動揺する「同盟関係」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中東研究	6. 最初と最後の頁 26-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山根聡	4. 巻 89
2. 論文標題 2018年のパキスタン：イムラーン新政権誕生は「静かなクーデター」か	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 紀要 国際情勢	6. 最初と最後の頁 103-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山根聡	4. 巻 745
2. 論文標題 解「国」新書 債務対策が急務のパキスタン：イムラン新首相への期待と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際開発ジャーナル	6. 最初と最後の頁 68-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計21件 (うち招待講演 15件 / うち国際学会 11件)

1. 発表者名 Norihiro Naganawa
2. 発表標題 Officious Aliens: Tatars' Involvement in the Central Asian Revolution
3. 学会等名 SHS Weekly Colloquium, Institute for Advanced Study, Princeton (online) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Norihiro Naganawa
2. 発表標題 Making an Anti-imperialist Empire: Revolutionary Russia and the Muslim World
3. 学会等名 NYU Jordan Center for the Advanced Study of Russia (online) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Norihiro Naganawa
2. 発表標題 Reconfirming the Khalidiyya Ties: 'Abd Allah al-Ma' adhi on his Hajj in 1910
3. 学会等名 ラスレーフ記念会議：ロシアの歴史と現在におけるイスラーム（ロシア語）チェリャビンスク国立大学（オンライン）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Norihiko Naganawa
2. 発表標題 タタール人の見たプハラ革命：内訌と外部要因（イギリス、アフガニスタン、トルコ）（ロシア語）
3. 学会等名 ロシア帝国とソ連のあいだ：地政学の中の中央アジア（ロシア語）ロシア科学アカデミー世界史研究所（オンライン）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 So YAMANE
2. 発表標題 世界的病原菌の感染と文学
3. 学会等名 国際ウルドゥー語会議「世界的病原菌の感染と文学」（オンライン）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山根聡
2. 発表標題 18世紀バンジャープのスーフィー詩人ブッレー・シャーについて
3. 学会等名 スーフィズム共生研究会 京都大学（オンライン）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 So YAMANE
2. 発表標題 過去の再編成：19世紀後半のムスリム文化人による記述
3. 学会等名 TINDAS研究会 東京大学（オンライン）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山根 聡
2. 発表標題 新型コロナウイルス禍におけるパキスタン：社会的公正を掲げる政権と現実
3. 学会等名 国際情勢研究会（東京 オンライン）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 So YAMANE
2. 発表標題 イクバルとウルドゥー語
3. 学会等名 国際ウルドゥー会議「イクバルとウルドゥー語」（オンライン）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 草野大希
2. 発表標題 シリア紛争における『保護する責任』規範の『濫用』
3. 学会等名 日本平和学会・秋季研究大会、軍縮・安全保障分科会（オンライン）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 長縄 宣博
2. 発表標題 Grazhdanskaia voina kak tsivilizatorskaia missiia: Rol' tatarskikh politrabotnikov Krasnoi armii v Turkestane
3. 学会等名 Mezhdunarodnyi kollokvium "Grazhdanskaia voina v Rossii: zhizn' v epokhu sotsial'nykh eksperimentov i voennykh ispytani, 1917-1922"（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長縄宣博
2. 発表標題 Revenge on the World Capitalists: How Tatars became Liberators of the East
3. 学会等名 51st Annual Convention of Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長縄宣博
2. 発表標題 Nazad v budushchee? Puteshestvie v Zakaspiiu i Bukharu v epokhu para i pechati
3. 学会等名 Slavic-Eurasian Research Center 2019 Winter International Symposium, "Tsars' Regions between Literary Imaginations and Geopolitics" (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山根聡
2. 発表標題 南アジア・イスラーム復興思想の拡散に見る翻訳活動
3. 学会等名 現代中東地域研究次世代共同研究会2019年度第1回「現代ムスリム知識人の地域横断ネットワークに関する研究 ウズベキスタン・シリア・リビアのウラマー・スーフィーの交流を中心に(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山根聡
2. 発表標題 日本におけるウルドゥー語教育の歴史
3. 学会等名 第12回国際ウルドゥー会議(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長縄宣博
2. 発表標題 “What a Muslim Region of Imperial Russia Tells,” “Writing a Transnational History of Russia’s Civil War”
3. 学会等名 International Laboratory “Russia’s Regions in Historical Perspective,” Higher School of Economics in Moscow (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長縄宣博
2. 発表標題 Tatars at Imperialist Wars: From the Tsar’s Servitors to the Red Warriors
3. 学会等名 50th Annual Convention of Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 長縄宣博
2. 発表標題 XIX-XX . (ヴォルガ・ウラル地域のムスリム社会を変容させる要因としての国民皆兵：19世紀末から20世紀初頭)
3. 学会等名 国際会議「ロシア帝国における宗教的（非）寛容」ナザルバエフ大学、カザフスタン共和国アスタナ市（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 長縄宣博
2. 発表標題 ： (内戦から東方の革命へ：カリム・ハキモフ、中央アジアから紅海へ)
3. 学会等名 国際会議「カリム・ハキモフ：人生とは乗り越えるもの」ロシア連邦オレンブルグ市（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 草野大希
2. 発表標題 ウィルソンのリベラル介入主義の再考：介入の「構造的問題」に直面していたウィルソン
3. 学会等名 日本国際政治学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山根聡
2. 発表標題 「静かなクーデター」による新政権樹立：パキスタン外交や治安の課題
3. 学会等名 中東情勢研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 Tat'iana Kotiukova, Dina Amanzholova, Vladimir Bobrovnikov, Aminat Chokobaeva, Cloe Drieu, Jamil Gasanli, Adeeb Khalid, Alexander Morrison, Norihiro Naganawa, Pavel Shablei 他33名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 St. Petersburg: Aleteiia	5. 総ページ数 654
3. 書名 ロシアとユーラシアのイスラーム：アラポフ教授記念論集（ロシア語）	

1. 著者名 Ahmet SARIKURT, Ayshe KAYAPINAR, Mustafa TURKESH, Tetsuya SAHARA, Levent KAYAPINAR, Ilker ALP, Evgeniia IVANOVA, Emin ATASOY, Mikhail IVANOV, Deyan KIURANOV, Ibrahim KAMIL, Zeynep ZAFER, Mehmet HACISALIHOGU, Neriman ERSOY HACISALIHOGU	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Chorlu Belediyesi Yayinlari	5. 総ページ数 307
3. 書名 1989年ブルガリアからのトルコ人強制移住から30年（トルコ語）	

1. 著者名 野田仁、小松久男、小沼孝博、坂井弘紀、秋山徹、宇山智彦、塩谷哲史、河原弥生、植田暁、清水由里子、濱本真実、佐々木紳、帯谷知可、長縄宣博、ティムール・ダダバエフ	4. 発行年 2019年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 315
3. 書名 近代中央ユーラシアの眺望	

1. 著者名 Liubichankovskii S.V., Dzhundzhuzov S.V., Koval' skaia S.I., Abashin S.N., Abylkhozhin Zh.B., Vasil' ev D.V., Vasil' ev I.Iu., Gafarov A.A., Godovova E.V., Dmitriev V.V., Zagidullin I.K., Ikeda Y., Matsuzato K., Morrison A., Naganawa N., Nasonov A.A., Smolarts E., Tsirulev R. et al.	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Orenburg: Izdatel' skii tsentr OGAU	5. 総ページ数 480
3. 書名 Imperskaia politika akkul' turatsii i problema kolonializma (na primere kochevykh i polukochevykh narodov Rossiiskoi imperii)	

1. 著者名 小松久男、八尾師誠、長縄宣博、山根聡、藤波伸嘉	4. 発行年 2019年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 265
3. 書名 歴史の転換期10 1905年 革命のうねりと連帯の夢	

1. 著者名 Randall Poole, Paul Werth, Norihiro Naganawa, G.M. Hamburg, Patrick Lally Michelson, Victoria Frede, Heather Coleman, Daniel Scarborough, Eugene Clay	4. 発行年 2018年
2. 出版社 University of Pittsburgh Press	5. 総ページ数 314
3. 書名 Religious Freedom in Modern Russia	

1. 著者名 山根聡・井坂理穂(共編著)、サウミヤ・グプタ、上田真啓、山田桂子、浜井祐三子、小松久恵、池亀彩、小杉泰	4. 発行年 2019年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 391
3. 書名 食から描くインド 近現代の社会変容とアイデンティティ	

1. 著者名 山根聡・黒崎卓・子島進(共同執筆)、長崎暢子、柳澤悠、井坂理穂、粟屋利江、近藤則夫、絵所秀紀、田辺明生、佐藤宏、杉原薫	4. 発行年 2019年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 468
3. 書名 南アジア史4 近代・現代	

1. 著者名 John Dixon, Max J. Skidmore, Tetsuya Sahara, Maria Cella Toro, Frederick Gagnon, Kevern Verney, Charlie Whitham, Karol Bieniek, Grzegorz Nycz, Bogdan Szklarski, Maciei Herbut, Karol Chwedczuk-Szulc, Klaus Larres, Magda Shaheen, Mustafa Turkes, Tolghan Akdan, John Stremiau, Scott Lawrence Spehr, Aigul Adibayeva	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Westphalia Press	5. 総ページ数 345
3. 書名 Donald Trump 's Presidency: International Perspectives	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐原 哲也 (Sahara Tetsuya) (70254125)	明治大学・政治経済学部・専任教授 (32682)	
研究分担者	山根 聡 (Yamane So) (80283836)	大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・教授 (14401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	草野 大希 (Kusano Hiroki) (90455999)	埼玉大学・人文社会科学部研究科・教授 (12401)	
研究分担者	ガンバ ガナ (Gamba Gana) (90624825)	国際教養大学・国際教養学部・助教 (21402)	2019年度から中国の大学に移籍したため、研究分担者から外れる。

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 Tsars' Regions between Literary Imaginations and Geopolitics	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 An Anarchist Turn? Imperial Rule and Resistance in the Long Twentieth Century	開催年 2022年～2022年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関